重要無形文化財指定70周年
結城紬、匠の技

本市を代表する伝統産業、結城紬。結城紬は約40の製作工程を経て、一反の紬として作られます。すべて工程が手作業で行われていて、柔らかな独特の肌触りや丈夫で保温性のある点が特徴です。

結城紬で重要となる「糸つむぎ」「絣(かすり)くくり」「地機(じばた)織り」の3つの技術は、昭和31年(1956年)に国の重要無形文化財に、平成22年(2010年)にユネスコ無形文化遺産に登録されています。

今年は、重要無形文化財に指定されて70年となります。この3つの技術を中心に結城紬について振り返ります。

問 ●製品・振興について　市商工観光課　TEL 34-0420
●歴史・文化財について　市生涯学習課　TEL 32-1931

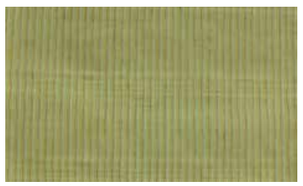
結城紬の原料

原料は、蚕が作る繭(まゆ)です。蚕(かいこ)を飼育し繭を生産する「養蚕(ようさん)」、繭をお湯の中で袋状に広げ、5～6個重ねて、大きな袋状にする「真綿かけ」の工程を経て袋真綿を作ります。

着物一着を製作するのに、繭玉約2,000個、真綿で370～380枚ほどが必要となります。

結城紬のデザイン

▲亀甲模様



▲縞模様

▲音符模様

▲まゆげった模様

結城紬の伝統的なデザインは、亀甲などの絣模様や縞模様、無地があります。近年では、これら以外にも多様な柄がデザインされています。

音符模様は、「帯状」といわれる一直線に柄が装飾されたものです。音符やト音記号が着物をかわいらしくしています。

市のマスコットキャラクターまゆげったがデザインされているものもあります。これは着物全体に一定の間隔で互い違いに柄を配した装飾「飛柄」というものです。曲線を表現するのが難しいといいます。

糸つむぎ

「つくし」という道具に、引き伸ばした真綿を絡ませて、指先で一定の太さの糸状に引き出し紡ぎます。結城紬の糸は、一般的な糸と異なり、撚(よ)りをかけない無撚糸(むねんし)です。

絣くくり

設計図案をもとに絣くくりを行う部分を墨で目印を付ける「墨付け」の作業を経て、綿糸で一つひとつ手と口で縛り付けます。作製する柄に応じて縛る部分が増え、時間を要します。縛った部分は染色時に色が染まらないので、織り上げると模様として残ります。

地機織り

「地機」という、最も原始的な織り機で織り上げます。腰当てに経糸(たていと)を結び付け、全身で張り具合を調節し、緯糸(よこいと)を大きな杼(ひ)で強く打ち込んで織り込みます。一反を織り上げるのに、１カ月から１年程度かかります。

結城紬の企画

毎年11月、市内北部市街地を会場とした「きものday結城」を開催しています。着物姿でのまち歩きをはじめ、お寺でランチを食べたり、人力車に乗ったりと、普段できない体験ができる結城ならではのイベントです。

10月5日に行われたランチタイムコンサートでは、「東京室内管弦楽団」のメンバー4人が結城紬をまとい、たくさんの楽曲を演奏し会場を魅了しました。

コンサート後、4人は北部市街地を歩き、結城紬の文化に触れ、健田須賀神社と武勇で演奏をしました。

毎年、市内中学2年生を対象に、ふるさと体験授業として結城紬の着心地体験を行っています。

ゆうき着楽会の皆さんの協力を得て、着付けや着用時の作法などについて学び、青少年のうちから結城紬に慣れ親しむ機会をつくっています。